

との意義を謳う。とりわけ先達に見る自由さ、そのとらわれのない自然なふるまい、言動について語る著者の記述は、先達への敬愛に満ちている。こうした記述に、臨床における大切なものが次の世代へと伝達されていく、いわば精神分析的繋がり源流を見る気がする。

そして最後に、精神療法家として「信じることの大切さ」を強調し、ペンは置かれる。

一貫して著者は、「心の見立ては、『人間存在の見立て』でなければならない」と説く。たとえば発達障害と診断した後に、それ以上理解しようとする姿勢をもたなくなってしまうありがたに疑問を抱き、「エビデンス」至上主義に走る現代の動向に対して、「何を信じていいのかわからなくなった現代人の不安に対する防衛」と分析し、そうした風潮に一石を投じる。そして、「とらわれている自分」と向かい合うことが、「臨床における自由さ」であり、それがまさに精神療法家の究極の目標であると主張する。

本書は、まさに読者を臨床の原点に立ち返らせてくれる貴重な書である。

忘れられた森田療法

歴史と本質を思い出す

岡本重慶著

創元社、四六判 290 頁、2,000 円、2015 年 2 月刊

(顕メンタルクリニック) 岩木久満子

著者は、歴史ある森田療法の専門施設である、京都の三聖病院に約 40 年もの長きにわたり、非常勤医師として従事していた。残念なことに、同病院は平成 26 年末に閉院となってしまったが、そこで行われていた「禪的森田療法」の手法を後世に伝えることのできる治療者として、貴重な存在である。

この本は、森田療法の原法を重視する著者が、現代の森田療法を憂え、その本質が忘れられている、と警鐘を鳴らす目的で書かれている。まずそれらの指摘に対し、いくつか私見を述べたい。著者は繰り返す、森田療法が現代の教育や福祉、企業などの分

野にもっと生かされるべきだ、と述べているが、実はすでに何年も前からこれらの分野で森田療法を生かそうとする努力が続けられており、その成果は日本森田療法学会で多く報告されている。そのため、この指摘は腑に落ちなかった。また「森田は『神経衰弱』概念を否定して『神経質』と呼ぶのが正しいと力説した」と述べているが、森田は神経衰弱概念そのものをすべて否定したわけではなく、神経衰弱と診断された患者の一部に神経質者がいる事を見出し、両者を区別して正しく治療する必要性を強調していた、と理解している。さらに、「最近の森田療法は認知行動療法を取り入れている」との指摘は、一部にそうした治療者がいるのかもしれないが、それが主流ではないので、違和感があった。

しかしこの本は、以上の記述を問題としない位、ひとつひとつの章の内容が充実しており、大きな魅力となっている。著者の深い知識と旺盛な研究心により、各々のテーマが深く掘り下げられており、非常に読みごたえがある。

たとえば、第 2 章の「神経質」論を顧みる'では、特に九州大学の入江英雄医学士が森田の神経質概念への批判をした話が、大変興味深かった。また、森田正馬の神経質概念の確立に先駆けて「神経質と其療法」という本を著した、中村讓氏の足跡について、丹念に調べ上げ、その神経質論の違いについて言及している。第 3 章の「人間、森田正馬」では、特に森田正馬の雅号である「形外」の意味が、「形式を無視し人間の心の事実生きる」という意味ではないかとする、森田の元入院生である大西氏の発言を示した上で、森田の「形外」という表現に直接かかわった原安民や、森田の尊敬していた橋本雅邦、岡倉天心の経歴や人物像、美術思想などについて著者の深い知識が余すところなく述べられており、大変面白い。第 4 章の「生活の発見」を再発見する'に至っては、生活の発見会の「生活の発見」という命名が、林語堂の著書の日本語訳を由来としたという話からはじまり、永杉喜輔氏、長谷川洋三氏、そして下村湖人氏と、水谷啓二氏との関係について詳細に描かれており、興味深かった。

この本は、森田療法の知られざる歴史を知りたい方には、うってつけの良書である。